

オリゲネスの聖書解釈と反ユダヤ主義の問題

出村 みや子

1) オリゲネスと反ユダヤ主義の問題 序論

従来の教父学において反ユダヤ主義の問題は重要な論点とはなっておらず、オリゲネスについても反ユダヤ主義の主題のもとに論じられることは稀であった。特に後者の場合には、オリゲネスにおけるユダヤ教の問題を包括的に扱った De Lange の研究によって、彼がパレスチナのラビとの学術的交流に開かれていたことが明らかにされて以来¹⁾、オリゲネスの神学形成におけるユダヤ教の要素が専ら重視されてきたと言える。しかしストロウムサの研究に代表されるように、宗教学者たちは現代のグローバル化した宗教・文化的状況において聖書および教父文献における反ユダヤ主義の問題を急速に学問の対象として関心を寄せ始めている²⁾。というのもこれらの初期キリスト教文献には、宗教間対立、反ユダヤ主義や反セミティズムといった現代社会の宗教に関わる問題状況を歴史的に考察する上で示唆的な、初期キリスト教と他宗教との関係を具体的に示す興味深い資料が豊富に含まれているからである。

こうした研究状況の下、オリゲネス研究においても新たな局面を迎えたことを示すのが、2001年の夏にピサで開催された第8回オリゲネス学会 (Colloquium Origenianum Octavum) であった。今回の学会のテーマとして選ばれたのは、「オリゲネスの著作と思想の背景におけるアレクサンドリアの諸文化 (The Cultures of Alexandria in the Background of Origen's Work and Thought)」という主題であるが、それはユネスコによる古代アレクサンドリア図書館の再建事業と機を一にして、オリゲネスの思想をその文化的コンテクストにおいてとらえることに焦点を当てている。

本稿との関連で特に注目したいのが、ロバート・ヴィルケンがそのオープニング・

セッションにおいて行った「反ユダヤ主義とオリゲネス研究 (Anti-Judaism and Scholarship on Origen)」と題する講演である³⁾。ヴィルケン は、オリゲネスとユダヤ教の関係を主題としたこれまでの研究のうち、特に「反ユダヤ主義」の概念を「問題発見のカテゴリー (a heuristic category)」として扱っている研究を概観し、それらにおいて相反する結論が導き出されていることに注目する⁴⁾。そこで彼は、オリゲネス研究においてこの問題をどのように位置づけるべきかを考察し、「反ユダヤ主義」という用語が現在流布しているが、わたしには初期キリスト教の思想、特にユダヤ人とオリゲネスの思想を理解するために有効なカテゴリーであるとは確信していない。これは磁石のようにある種のテキストを議論に引き入れるが、他のテキストを排除してしまう。それはキリスト教の中に築かれたユダヤ教に対する関係の弁証法を崩す」と述べている。さらにヴィルケンは、これまでのオリゲネス研究の動向からも裏付けられるように、オリゲネスがユダヤ教に対して両義的な姿勢を示していることが確認されるゆえに、オリゲネスが反ユダヤ主義者か否か、という単純な問題設定ではオリゲネスの思想に有効に接近することはできないと主張する。そして「キリスト教とユダヤ教にはリアルで有意義な相違があり、キリスト教の思想家たちは、ユダヤ教の習慣や思想について批判的に記述をすることなしには、彼らの最も深い信仰を表明することができなかったのだ」と結論づけている。

こうした指摘を踏まえて今回の研究で採り上げるのは、次章で紹介するような一連のヨセフス研究者たちによって、反ユダヤ主義の文脈で提起されたオリゲネス批判の問題である。それによればオリゲネスはいくつかの箇所、エルサレム神殿の崩壊の原因をユダヤ人による義人ヤコブの殺害の罰とみなす記述の証言をヨセフスに帰すと同時に、さらにそこからイエスの死に対するユダヤ人の責任論へと発展させる一連の反ユダヤ主義的記述を行っているが、しかしそれらに該当する箇所は現存するヨセフスの記述には見当たらないという。従ってそうした反ユダヤ主義的記述は捏造されたものと結論せざるを得ず、そのようなオリゲネスの記述が後代に及ぼした反ユダヤ主義的叙述の影響は無視できないものであるという⁵⁾。これらのオリゲネスの反ユダヤ主義的記述の存在は、これまでのオリゲネス研究者がほとんど見過ごしていた問題であり⁶⁾、確かにオリゲネスの著作のうちでも、特にカイサレイアに移住後に執筆された後期の著作にはユダヤ教に対する痛烈な批判が多く認められる。しかしヨセフス研究者たちが言うように、それをオリゲネスの個人的資質の問題として論じることは果

たして適切であろうか。なぜならオリゲネスがカイサレイアに移住後に、『ヘクサブラ』や多くの聖書注解、ホミリアなどを手がけながら、聖書神学者として聖書を解釈してゆく過程において、キリスト教と競合関係にあったユダヤ教のラビたちから積極的に学んでいたことは事実であり、両陣営の間に対立抗争関係があったとは認められないからである。従ってこの問題を当時の宗教・文化的状況の文脈において考察する必要があるのではないか。この研究はそのような問いから出発する。そこで本稿では、ヴィルケンが指摘した「磁石の両極」の視点を念頭に置きつつ、オリゲネスの聖書解釈における反ユダヤ主義的記述の問題を扱いたい。

2) オリゲネスによるヨセフ引用の問題

まず、最近のヨセフスの研究者たちが指摘する、オリゲネスにおけるヨセフ引用と反ユダヤ主義的記述の問題について概観したい。この問題は先に述べたようにオリゲネスによるヨセフ引用に端を発しているが、この問題は非常に複雑な様相を呈している。というのもヨセフス研究者ツヴィ・バラス (Zvi Baras) の論文によれば⁷⁾、ヨセフスのテキストへのキリスト教側からの改竄と明らかに推定される『ユダヤ古代誌』18巻の「キリスト証言」(いわゆる「フラウィウス証言」)の場合⁸⁾、オリゲネスはその証言を伝えていないことが示される一方で、オリゲネスがヨセフスによる反ユダヤ主義的記述の証言として引用しているいくつかの箇所については、現存するヨセフスのテキストに該当する記述がないことが指摘されている。またヨセフスによる反ユダヤ主義的証言としてオリゲネスが引用したものが、さらにエウセビオスにおいて発展を遂げていることも指摘されているからである⁹⁾。そこでオリゲネスの反ユダヤ主義的傾向の記述とそれに該当するヨセフスの記述としてバラスの挙げる箇所を見ておきたい。

オリゲネス『ケルソス駁論』第1巻47

なぜならヨセフスは、『ユダヤ古代誌』の第18巻で、ヨハネが洗礼者であり、洗礼をうけた者に潔めを約束した、と証言しているからである。この著者はイエスをキリストと信じなかったが、エルサレムの陥落と神殿の破壊の原因を追及した。彼は次のように言うべきであった。イエスにたいする陰謀のためにこれらの破局がこの民を見舞ったが、それは彼らが預言されたキリストを殺したからだ、と。しかし、

彼はそれに気づいていないが、これらの災禍がキリストとも呼ばれたイエスの兄弟であった義人ヤコブのための復讐として——彼らは、この上なく義しい者だったこの人物を殺したのだ——ユダヤ人を見舞ったと言うとき、真理から遠くはないのである。このヤコブはイエスの真の弟子であるパウロが見たとやっているあのヤコブである。パウロは、彼を主の兄弟として叙述し、二人の血縁関係や二人の生い立ちよりも、彼の正しい生活と知力に言及している。それゆえに、彼はエルサレムが破壊されたのはヤコブのためだったと言っているが、これはキリスト・イエスのために見舞った、と言う方が理に適っていないだろうか。

ヨセフス『ユダヤ古代誌』第 18 巻 63-64

さてこのころ、イエスス（イエス）という賢人——実際に、彼を人と呼ぶことが許されるならば——が現れた。彼は奇跡を行う者であり、また、喜んで真理をうけ入れる人たちの教師でもあった。そして、多くのユダヤ人と少なからざるギリシア人とを帰依させた。彼 [こそ] はキリストス（キリスト）だったのである。

ピラトス（ピラト）は、彼がわれわれの指導者たちによって告発されると、十字架の判決を下したが、最初に [彼を] 愛するようになった者たちは、彼を見すてようとはしなかった。[すると] 彼は三日目に復活して、彼らの中にその姿を見せた。すでに神の子の予言者たちは、これらのことや、さらに、彼に関するその他無数の驚嘆すべき事柄を語っていたが、それが実現したのである。なお、彼の名にちなんでクリスティアノイと呼ばれる族は、その後現在にいたるまで、連綿として残っている。

まずオリゲネスの記述を見れば、ここで彼は「エルサレムの陥落と神殿破壊の原因を追究した」者としてヨセフスを引き合いに出し、「これらの災禍がキリストとも呼ばれたイエスの兄弟であった義人ヤコブのための復讐としてユダヤ人を見舞った」、さらに「エルサレムが破壊されたのはヤコブのためだった」という記述をヨセフスに帰しているが、ヨセフスの現存するテキスト（『ユダヤ古代誌』第 18 巻 63-64）にはそのような記述は見当たらない。さらにオリゲネスは、「彼は次のように言うべきであった。イエスにたいする陰謀のためにこれらの破局がこの民を見舞ったが、それは彼らが預言されたキリストを殺したからだ、と」と述べ、さらに「それゆえに、彼はエルサレムが破壊されたの

はヤコブのためだったと言っているが、これはキリスト・イエスのために見舞った、と言う方が理に適っていないだろうか」と述べて、ヨセフスの発言を訂正すらしているが、それは当然のことながらヨセフス研究者の批判を招いている¹⁰⁾。

次にヨセフス『ユダヤ古代誌』第18巻の記述に目を向ければ、この箇所は「フラウィウス証言 (Testimonium Flavianum)」として知られる箇所であり、この証言はカエサレリアのエウセビオス (後260-339年) が『教会史』に引用 (「証言」のヴルガーテキスト) して以来、イエスの神性やメシア性を証言するユダヤ教側の信頼に足る証言としてしばしば論争に利用された。しかし16世紀以来、この証言の真正性が論争され、ユダヤ側とキリスト教側で議論が続いている。しかしヨセフス学者たちは、この証言はキリスト教側の改竄であろうと推測する。その有力な根拠が、「二つの主要な重要資料であるエウセビオスとオリゲネスの間の矛盾」¹¹⁾であり、『ケルソス駁論』第1巻47にも、次に引用するオリゲネス『マタイ福音書注解』第10巻17にもヨセフスによる「キリスト証言」は見られないのである。オリゲネスの『マタイ福音書注解』は次の通りである。

オリゲネス『マタイ福音書注解』第10巻17

このヤコブは性格が義なるゆえに、ユダヤ人の中では輝けるものであった。それゆえに、フラウィウス・ヨセフスは『ユダヤ古代誌』第20巻で、この民族がなぜそのような災禍をこうむり、ついには聖なる家まで破壊されるに至ったかを記録したとき、キリストと呼ばれたイエスの兄弟ヤコブに加えた仕打ちのために、これらの災禍が神の怒りによって彼らを見舞った、と言っている。彼はイエスをキリストとして受け入れなかったが、それにもかかわらず、彼がヤコブを大変な義人であったと証したことは立派なことである。彼はさらに、この民はヤコブのためにこれらの災禍をこうむったと考えている、と言っている。

オリゲネスは『マタイ福音書注解』第10巻17でも『ケルソス駁論』第1巻47と同様に、神殿崩壊の原因をイエスの兄弟ヤコブの殺害に求める記述をヨセフスに帰していることと、「キリスト証言」が見られないことが確認される。しかしオリゲネスがヨセフスの証言とみなす箇所 (『ユダヤ古代誌』第20巻200-201) を見てみると、ヤコブの死に対しては、「市中でもっとも公正な精神の持ち主とされている人たちや、律法の遵守に厳格な人たちは、この事件に立腹した」と述べられているのみであるが、

オリゲネスのこれら二つの箇所では、ヤコブの死に関するこの記述がユダヤ民族の災禍や神の怒りへと拡大解釈されていることがわかる。オリゲネスのこのような記述態度について秦剛平は、「ヨセフスはこれ以上のことは何も述べてはいないし、ここ以外にヤコブに言及する箇所はほかにない。そもそもヨセフスは、ヤコブの死それ自体に特別の関心を払ってなどはない。彼の死をエルサレムの荒廃に結びつけるのは、キリスト教の独自の歴史解釈にもとづく、オリゲネスの神学的解釈ないしは神学的盲信なのである」と手厳しく批判している¹²⁾。ヨセフスのテキストは次の通りである。

ヨセフス『ユダヤ古代誌』第 20 巻 200-201

彼（アンナス）はフェーストス（フェストス）が死に〔後任の〕アルピノス（アルピヌス）がまだ赴任の途中にあるときこそ絶好の機会と考えた。そこで彼はスネドリオン（サンヘドリン）の裁判官たちを召集した。そして彼はキリストス（キリスト）と呼ばれたイエスース（イエス）の兄弟ヤコーボス（ヤコブ）とその他の人びとをそこへ引き出し、彼らを律法を犯したかどで訴え、石打ちの刑にされるべきであるとして引きわたした。市中でもっとも公正な精神の持ち主とされている人たちが、律法の遵守に厳格な人たちは、この事件に立腹した。

エルサレム神殿の崩壊の原因をヤコブの殺害に求める証言をヨセフスに帰しつつ、さらにその原因をイエスの死に結びつける同様の記述が、オリゲネスの次の二箇所にも認められる。

オリゲネス『ケルソス駁論』第 2 巻 13

エルサレムがまだ立っていて、ユダヤ人の礼拝がそこで執り行われていたとき、イエスはそこにローマを介して起ころうとしていることを預言した。人は、イエス自身の弟子や聴衆たちが福音の教えを書き記したりしないで伝えたとか、イエスの思出を文書に残さないで弟子たちのもとを離れて行った、などとは言えない。福音書にはこう書かれている。『エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たら、その破壊が目近に迫っていることを知るのだ』と。当時エルサレムを包囲している軍隊は周辺に一つもなかった。包囲攻撃はネロがまだ皇帝だったときにはじまり、ウェスパシアヌスの治世まで続き、彼の息子のティトゥスがエルサレムを陥落させた。ヨセフス

はキリストと呼ばれたイエスの兄弟で義人のヤコブのためにそうなったと言っているが、実際は神の子キリスト・イエスのためだったのである。

オリゲネス『ケルソス駁論』第4巻22

わたしは、ユダヤ全民族がイエスに加えたこれらの災禍のために一世代足らずで滅びたと言うとき、この申し立てを真実でないとする者に挑戦する。彼らがイエスを十字架にかけたときからエルサレムの陥落までの期間は四十二年であった。…彼らは、神にたいして深遠な秘儀の象徴である慣例的な儀式を執り行っていたエルサレムで、人類の救い主である主にたいして陰謀を働いたとき、もっとも不敬虔な犯罪を犯したのである。それゆえに、イエスがこれらの屈辱をなめたあの都は徹底的に破壊されねばならなかった。ユダヤ民族は滅ぼされねばならなかった。そして至福への神の招きは、簡素で純粋な仕方ですべてに礼拝するという教えをうけた他の者たち——キリスト教徒のこと——に移ったのである。

オリゲネスが一連の記述において「ヤコブの殉教」を神殿陥落の原因とみなす証言をヨセフスに帰しつつ、さらにそれをイエスの死と結びつけるべきであったとヨセフスに対して「訂正」を加えることは、ヨセフスのテキストとはほど遠いものであり、以上のバラスや秦剛平の所見は、ヨセフス研究者としては当然の批判であろう。しかしオリゲネスの一連の反ユダヤ主義的記述は、オリゲネスの「盲信」（秦剛平）や、バラスの言う「彼らのキリスト教の歴史哲学的解釈」の所産に過ぎないのだろうか。

3 オリゲネスの福音書解釈と反ユダヤ主義の問題

オリゲネスの思想に有効に接近しつつこの問題を考察するための重要な手がかりが、オリゲネスの『エレミヤ書ホミリア』である。なぜなら『エレミヤ書ホミリア』の検討を通じて、これらの一連の反ユダヤ主義的視点が実際には福音書伝承自体に内在するもので、オリゲネスは聖書神学者としてこのような視点を彼自身の状況において再発見したのだとすることができるからである。実際にオリゲネスの一連の記述の背後には、旧約聖書と新約聖書をいかにして連続的にとらえるかという神学的問いが繰り返し確認されるのであり、彼はユダヤ教の知恵文学や福音書伝承のQ資料に基づいてその課題を遂行している¹³⁾。つまりオリゲネスの一連の反ユダヤ主義的記述の形成

には聖書伝承の影響が大きく作用しており、ヨセフスによる証言はそれを補強するための傍証にすぎないのである。そのことを『エレミヤ書ホミリア』の記述から見ておきたい。

オリゲネス『エレミヤ書ホミリア』XIV,5

それゆえ彼〔エレミヤ〕は——まず通俗的解釈を述べれば——「わたしは災いだ、母よ、いかなる男をあなたは生んだのか、全地で裁きに付され、紛争のもとである男を」と言ったのだ。しかし、わたしたちの先駆者たちのひとりがこの箇所専心して、エレミヤがこの言葉を向けたのは身体的意味での母ではなく、預言者たちを生む母に対してであると言っている。預言者を生むのは神の知恵でなくて、誰であろうか。それゆえエレミヤは、「わたしは災いだ、母よ、いかなる男をあなたは生んだのか、知恵よ」と言ったのだ。だが知恵の子らは福音書にも記されている。「そして知恵は彼女の子らを遣わす」(Q ルカ 11:49 参照)。

このような訳で、「わたしは災いだ、わが母なる知恵よ、いかなる男をあなたは生んだのか。全地で裁きに付され、紛争のもとである男を」と言われたのかもしれない。もしエレミヤが、「いかなる男をあなたは生んだのか。全地で裁きに付され、紛争のもとである男を」と言うなら、「全地で」という言葉を説明することはできない。というのもエレミヤは「全地で裁きに付され」てはいないのだから。あるいはもしわれわれが強いてこの表現を用いようとするなら、「全地で」とは「ユダヤ全土で」の代わりなのではないか、と言おうか。というのも彼の預言は、彼が預言をした時点では「全地」には届いていなかったのだから。あるいはむしろ、エレミヤの名がむしろわれらの主イエス・キリストの代わりに他の無数の箇所で挙げられていることをわれわれが示したように、ここもまたそうであると言わないだろうか。最初にわたしは、「見よ、わたしはあなたを人々や諸国の上に立てる。抜き、壊し、滅ぼし、建て、植えるために」というテキストに注目した。エレミヤはそれをしてはいなかった。しかしイエスは、罪の王国を抜き、悪の建造物を壊し、彼はそれらの王国の代わりにわれわれの心に正義と真理が支配するようにしたのだ。それゆえにそれらの箇所をエレミヤよりもキリストに帰すことがふさわしいように、私が思うに、他の多くの箇所にもそれが適合するのだ。

同書 XIV,6

「わたしは災いだ」という表現について、これが冒瀆的に思われるゆえに、まず初めに論じる必要がある。他の者を「災いである」とみなした救い主が、「わたしは災いだ」と言うことはありえるのだろうか。救い主以外には適合しないことが同意されている箇所から、いかにして彼がまたエルサレムのために嘆かれたかを提示しよう。その嘆きの声が「災いだ」である。福音書には、彼がエルサレムを見て、彼女のために嘆き、そして「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか、等々」(Qルカ 13:34)と言ったと記されている。

同書 XIV,13

もしあなたが受難とエルサレムの陥落とこの都市の破壊の時を検討し、この民がキリストを殺したゆえに、どのように神が彼らを見捨てたかを検討するなら、あなたは神がこの民を寛大に扱うことはなかったのを見るだろう。

オリゲネスはここに引用した『エレミヤ書ホミリア』の三箇所において、預言者エレミヤの苦難をイエスのそれと重ね合わせ、さらにイエスの処刑をエルサレムの陥落の原因とみなす記述を行っているが、歴史的な文脈を無視した同様の手法はすでにヨセフ引用の問題において確認されたものであった。ここで預言者エレミヤとイエスを結びつける動機として「預言者を生む母なる知恵」の観念が導入されていることに注目したい。XIV,5に引用された「そして知恵は彼女の子らを遣わす」という表現はそのものとしては正典福音書にはないが、文脈からQルカ 11:49の「だから、神の知恵もこう言っている。『わたしは預言者や使徒たちを遣わすが、人々はその中のある者を殺し、ある者を迫害する』」というイエスの言葉に基づくパラフレーズと推測される。さらに『エレミヤ書ホミリア』XIV.6においても、Qルカ 13:34のイエスの嘆きの言葉「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか、等々」が引用され、これが預言者の言葉とイエスの言葉を結びつける解釈において重要な役割を果たしている。シュテックやジェイコブソンの

ような聖書学者たちは、これらの Q 資料の箇所には「預言者の職務と預言者が被るべき不幸な運命」を記した申命記的歴史観が見られることを指摘している¹⁴⁾。それゆえに救い主と預言者を密接に結びつけたものは、Q 資料に認められる「預言者に対する暴力的殺害の動機」であり、さらにアレクサンドリアの知恵伝承に見られる神の知恵の子らの派遣の動機であったと考えられる。さらに佐藤研は、Q 文書の成立の問題としてその段階的編集について言及し、「その際の意図は現行のイスラエル批判」にあったことを指摘している。佐藤は「結局、さまざまな研究者が自説を述べ合う中で、イスラエル批判の層が一つの編集層としてあるという点では、漠としたコンセンサスが出来つつある」と述べている。これは Q を担った人々の「宣教がついに華々しい成果を収めることがなかったことと無関係ではない」のであって、イスラエル自体は「回心」しないままであった。そのため、イスラエルを断罪する預言者的言葉が増えていったのだと佐藤は推測する（その例として、Q ルカ 19:12, 13-15, 11:29-32, 49-51, 13:34-35 が挙げられている¹⁵⁾。

筆者はかつてオリゲネスの歴史観におけるアレクサンドリアの知恵神学の影響を論じた研究において、このような福音書伝承理解の背後に帝国による迫害という具体的状況を想定したのであった¹⁶⁾。実際オリゲネスがカイサレイアで直面していたのは帝国による迫害の危険であって、ユダヤ教との対立抗争ではなかったと考えられる。序論で示したように、オリゲネスはキリスト教と競合していた当時のユダヤ教のラビたちと学術的交流があり、聖書解釈をめぐる公開の議論も行っていたことが知られている。従って、オリゲネスのこうした反ユダヤ主義的記述は、彼の個人的資質というよりは、ヴィルケンが指摘した「キリスト教の中に築かれたユダヤ教に対する関係の弁証法」を、オリゲネスが聖書神学者として福音書伝承のなかに認めた結果であると考えられる。「ユダヤ教の習慣や思想について批判的に記述をすることなしには、彼らの信仰を表明することができなかった」のは、聖書解釈をめぐるユダヤ教と競合関係にあった Q の担い手もオリゲネスも同様であったと思われる。

注

- 1) Nicholas R. M. De Lange, *Origen and the Jews.: Studies in Jewish-Christian Relations in Third Century Palestine*, Cambridge, 1976. Paul M. Blowers, 'Origen, the Rabbis, and the Bible: Toward a Picture of Judaism and Christianity in Third

- Century Caesarea', in Charles Kannengiesser and William L. Petersen (ed.), *Origen of Alexandria: His World and His Legacy*, University of Notre Dame Press, 1988, p. 96-116. は、基本的に De Lange の研究に賛同しつつも、聖書に関してオリゲネスとラビたちとの間で交わされた討論が、学問的知見の交換と言うよりは、相互拒否の表明にすぎなかったとの見方を示している。
- 2) Guy G. Stroumsa, 'From Anti-Judaism to Antisemitism in Early Christianity?' in Ora Limor and Guy G. Stroumsa (ed.), *Contra Iudaeos: ancient and medieval polemics between Christian and Jews*, J. C. B. Mohr, 1996, p. 1-26.
- 3) Robert L. Wilken, 'Anti-Judaism and Scholarship on Origen' (2001年夏にピサで開催された国際オリゲネス学会における主題講演要旨より引用)。
- 4) ヴィルケン は反ユダヤ主義の問題を論じた研究の実例として、以下の三つの研究を挙げている。まずオリゲネスの反ユダヤ主義が歴史的状況の反映ではなく、むしろキリスト教の思想に深く浸透したものであることを示した Miriam S. Taylor の研究 (*Anti-Judaism and Early Christian Identity*, Brill, 1995), 次にオリゲネスの『マタイ福音書注解』と『ケルソス駁論』に見られる反ユダヤ主義的な箇所を考察した Hermann-Josef Vogt の論文 "Die Juden beim späten Origenes" (これは Herbert Frohnhofen (ed.), *Christlicher Antijudaismus und Jüdischer Antipaganismus*, Hamburg, 1990 に収録されている)。その際フォークトは、オリゲネスがテキストのすべてに反ユダヤ主義的解釈を加えてはいないが、それらの引用が集積した結果として彼における反ユダヤ主義的解釈が強調される結果になるとみなしている。さらにヴィルケン は逆の立場からの研究として、Theresa Heither, OSB, "Juden und Christen. Anregung des Origenes zum Dialog", *Theologische Quartalschrift*, stuttgart 1997: を例に挙げている。ハイザーの研究はオリゲネスにおいてユダヤ人という概念が肯定的に用いられていることを指摘し、彼の時代におけるユダヤ人とキリスト教徒との間の神学的対話状況を示そうとしている。
- 5) ツヴィ・バラス (Zvi Baras) 「ヨセフスの「キリスト」証言とヤコブの殉教」(秦剛平訳), L. H. フェルトマン・秦剛平共編『ヨセフスとキリスト教 ヨセフス研究 2』山本書店, 1985年, 7-24頁。
- 6) その例外として前述の脚注5に挙げたフォークトの研究が挙げられる。
- 7) 前述のバラス論文(なお、以下の1-7までの引用は秦剛平による邦訳の引用を参照した)。
- 8) ヨセフス『ユダヤ古代誌』第18巻の「彼[こそ]はキリストス(キリスト)だったのである」という記述は、後代のキリスト教徒による加筆であり、「フラウィウス証言(Testimonium Flavianum)」として知られる(ヨセフス『ユダヤ古代誌』秦剛平訳, 山本書店, 1980年, 43-45頁参照)。この箇所がカエサレイアのエウセビオス(後260-339年)による引用以来、イエスの神性やメシア性を証言するユダヤ教側の信頼に足る

証言としてしばしば論争に利用されたことについて、詳しくはバラス論文を参照されたい。

- 9) 今回の発表では、紙幅の関係でエウセビオスの問題を扱うことはできないことをお断りしたい。エウセビオスは『教会史』第2巻22において、「ヘーゲシッポス（ヘゲシッポス）はこのように詳述しているが、それはクレメーンス（クレメンス）の報告とも一致している。実際、ヤコーボス（ヤコブ）は立派な人物で、その義のためにすべての者に知られていたと思われる。そして、思慮あるユダヤ人でさえも、彼の殉教直後にヒエルーサレーム（エルサレム）の包囲攻撃がはじまったのは、他のいかなる理由からでもなく、彼にたいする犯罪のためである、と考えた。
ヨセーポス（ヨセフス）も臆せずそのことを証言し、次のように書いている。
「これらのことは、キリストス（キリスト）と呼ばれたイエス（イエス）の兄弟である義人ヤコーボス（ヤコブ）の復讐として、ユダヤ人どもを見舞った。なぜならば、ユダヤ人は、彼がもっともすぐれた義人だったにもかかわらず、彼を殺したからである」と述べている。
- 10) バラスは注(10)において、オリゲネスがイエスとイエスの兄弟ヤコブを組にして言及していることに注意を促し、そのような言及の仕方が後世に影響を与えずにはいなかったことを指摘している。
- 11) 前述のバラス論文、邦訳10頁。
- 12) 秦剛平『ヨセフス イエス時代の歴史家』、ちくま学芸文庫、2000年、192頁。
- 13) この問題について、出村みや子「オリゲネスの歴史観とアレクサンドリアの知恵神学」、佐藤研編『聖書の思想とその展開 荒井献先生還暦・記念、献呈論文集』、教文館、1991年、315-339頁を参照されたい。この論文の段階では筆者はまだオリゲネスの記述を反ユダヤ主義の文脈において考察してはいないが、一連のユダヤ人批判の基調に知恵神学とQ資料の視点が認められることを論じている。
- 14) O. H. Steck, *Israel und das gewaltsame Geschick der Propheten. WMANT 23.* Neukirchen-Vluyn: Neukircher Verlag, 1967; A. J. Jacobson, "The Literary Unity of Q", JBL 101, 365-89 参照。
- 15) 佐藤研「Q文書」、木幡藤子・青野太潮編著『現代聖書講座第二巻 聖書学の方法と課題』日本基督教団出版局、1996年、276頁。
- 16) 前述の拙論参照。